様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：６２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４７２６

研究課題名（和文）離島の教育環境改善に資する社会関係資本形成の規定要因

研究課題名（英文）Factors for Social Capital Development that Contributes Improvement of Educational Environment

研究代表者
豊　浩子（Yutaka, Koko）

国立教育政策研究所・国際研究・協力部・フェロー

研究者番号：００７２７６８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：奄美大島では、地域のキーパーソンを中心に自治会や地域の団体を通じて地域のネットワークが活用され、地域社会関係資本が保持、再形成され、さらに島独自の伝統行事や芸能の継承活動を通じて、地域のつながりや地域に対する誇りが子ども達の島への愛着を育み、社会関係資本の形成に貢献している。また、市や教育委員会が行う学習支援事業により、教育環境改善に資する新たな社会関係資本が構築されている。密度の濃い社会関係資本が存在するがゆえに、「島に戻ればなんとかなる」という意識も生む。現在の島の限られた経済圏の中では就業機会は限られており、島で必要とされる資格やスキルを身につけられるためのキャリア教育が模索されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「島」という地域は独特の磁場を持ち、地域内で完結する結束型社会関係資本が希求され、形成され続けている。しかしながら、実際の経済、雇用には地域外への橋渡し型社会関係資本が不可欠になっている。結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の間には緊張関係が存在し得る。すなわち、橋渡し型社会関係資本のもたらす外部の経済論理に、結束型社会関係資本は呑み込まれやすいといえる。しかし、離島の場合は、外部の論理や力に対抗しうる「場」が結束型社会関係資本を形成し続け得る。両者のバランスをとった社会関係資本の形成、持続への取り組みが多様な立場から行われることは、他の離島にも同様に必要であることが示唆される。

研究成果の概要（英文）：In Amami Island, with main active people in a community, the community network has been utilized through the neighborhood community associations or non-profit organizations, and community social capital has been maintained or re-developed. Also, children have been learning the traditional festivals, dances, and music, and formed the attachment to their community, thus contributing the development of community social capital. Furthermore, the city government or the board of education has provided the extra learning opportunities, developing social capital that improves the educational environment. At the same time, such a dense social capital could lead some young people to think that they don't have to study hard as they can rely on the community support. However, job opportunities are limited in the current situation in the island, and more guidance and support are required so that they can obtain necessary qualification and skills to enable them to keep working in the island.

研究分野：教育社会学

キーワード：離島　社会関係資本　居場所　学習支援　伝統行事　キャリア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会関係資本＝ソーシャル・キャピタルは、「社会における信頼・互酬性の規範・ネットワーク」で表され、市民や地域全体の社会的なつながりを重視する概念として、政治学、社会学、経済学の分野で理論構築がなされ実証されてきた。教育における社会関係資本には、家庭内社会関係資本、クラス社会関係資本、学校社会関係資本、地域社会関係資本があり、それぞれ教育効果が諸外国の研究では認められている（露口 2011）。離島や過疎地域では、相互扶助といった地域内での社会関係資本の蓄積による地域課題の解決が期待されるが、現実には社会関係資本の形成が不十分で、人々の孤立が進み、問題化する地域も多い。離島における社会関係資本が、どのように形成、存続されているのか、その中で成功事例があれば、どのような要因が寄与しているのか、特に子供の教育環境改善のために社会関係資本はどのように有効かといった観点から、鹿児島県奄美大島を事例として、社会関係資本の形成と教育環境改善に関する調査を行うこととした。

２．研究の目的

本研究では、離島という過疎化、少子高齢化、貧困等の課題が顕著な地域において、人々の信頼や社会的ネットワークによって構成される社会関係資本が、どのように機能し、子供の教育環境に影響を与えているか、鹿児島県奄美大島を事例に調査を行う。それにより、(1)離島特有の歴史的、地理的特異性を踏まえた社会関係資本の実態と課題の把握、(2)社会関係資本の子供の教育環境への影響、(3)成功事例をふまえた地域に求められる社会関係資本形成のあり方の検討・考察、により、わが国の離島における子供の教育環境改善に資する社会関係資本の規定要因を明らかにし、今後、同様の課題を抱える地域に通底する教育施策への知見の提供を目的とする。

３．研究の方法

社会関係資本と教育環境についての国内外の文献及び奄美大島の社会関係資本形成についての歴史的経緯の文献研究を行った。また、中学生への教育環境に関する質問紙調査を実施した。さらに、教育委員会、町内会担当者、自治体担当者、NPO 担当者、地域の長老とされる方々など各関係者への聞き取り調査を行い、奄美市及び龍郷町の事例より、国内の他の離島に適用可能な社会関係資本形成と教育環境改善に関する総合的検討・考察を行った。

４．研究成果

（1）奄美市における「居場所」づくり

①　夏休み子ども塾&子ども食堂

近年、奄美市では、都市化が進み、地域のつながりが希薄化しているという懸念の声が聞かれるという。名瀬の浜里町自治会では、2017 年に「夏休み子ども塾&子ども食堂」を実施した。企画実施した奄美市名瀬下方地区の当時の生活支援コーディネーターの K さんは、地域福祉に携わり地域づくりをするにあたって、子どもたちをどう巻き込むかが大事だと感じており、子どもたちが自ら地域に積極的に関わる仕組みづくりを検討してきた。地域支え合い体制づくり事業の一環として、子ども達が地域に住むひとり暮らしの高齢者の日常のゴミ捨てを朝、登校時に代行する「小宿っ子お助け隊」（ゴミ捨て代行事業）」を実施した。高齢者と子どもが短時間だが挨拶を交わし触れ合うことは、高齢者のみならず子ども達にとっても有益な経験となっている。

　さらに夏休みに共働きやひとり親の家庭で一人過ごす子どもが少なくないため、複数の児童が集まり、大人もいる環境の中で勉強する機会を提供しようと、子ども塾と子ども食堂を実施した。子ども達は各自、宿題や問題集を持参し自習を行い、保護者らは回りながら勉強を教えたり、集中できるように声かけを行ったりした。日中、子どもが一人でご飯を食べるケースはかなりあり、この取り組みは、そういう子どもたちに居場所を提供する機会となった。

②配田が丘きょら会の「寺子屋」

奄美市名瀬の奄美地区にある配田が丘自治会では 2015 年から子ども会（きょら会）での「寺子屋」の活動が行われている。活動の中心となって企画実施を進める T さんは、子ども会が実質的に機能せず、地域での子どもの遊びがないと感じていたところ、「地域が子ども達に関わらないと、子ども達は家と学校を往復するだけでは、どこでも同じ。そのままでは、子どもは大きくなって（島を）出てしまったら、帰ってこない」「子どもが自立（自律）するためには、遊びの中から学ぶ社会教育が大切だ」と学んだことを契機に「子ども達の居場所を作りたい」という思いから「寺子屋」の活動を開始した。「寺子屋」は、町内の小学生が地域の人と一緒に楽しく何かをすることを目標に、毎月自治会の集会所で行う。同地区にある奄美高校家政科の生徒に協力してもらったり、外部の講師を招いたりしながら多世代交流を意識した活動を行っている。これらの活動は、地域の人々の、子ども達を地域で育もうという意識に支えられている。T さんは「子ども達がどうやったら、喜んでくれるか」と考えて企画し、「子ども達が『小学生の時に地域の皆さんとこんなことをしたなあ』と思い出せるような寺子屋活動を継続したい」とのことである。

③　金久中学校の「あまみ寺子屋」

奄美市の名瀬ライオンズクラブでは、2014 年度から 2017 年度まで奄美市立金久中学校で家庭学習支援を目的として「ライオン寺子屋」を実施した。週 1 回の夕方から夜にかけて、生徒の自習を元教員らボランティアがサポートし、休憩時の「おにぎりタイム」では社会人としての体験談を話し、百人一首やバスケットボールなどのレクリエーションも行なわれた。この寺子屋を始めた当時の名瀬ライオンズクラブ会長の X さんは「自分は島の大和村出身で、50 年前には全校生徒 100 人程の戸円小中学校に通っていた。試験勉強をするときには同級生で集まっていたが、今の子ども達にはそういう機会がないと感じていた。学校ではないところで居場所作り、思い出作りができると、いったん島の外に行った子が『奄美には、気にかけてくれる大人の人たちがいたね』と思い出し、島に帰ってきたいと思ってくれるといい」と語る。

（2）奄美市学習支援事業

① あまみ子ども読書・新聞応援プロジェクト

「あまみ子ども読書・新聞応援プロジェクト」に関する協定が奄美市 PTA 連絡協議会、南海日日新聞社、奄美新聞社、及びラジオ局のあまみエフエムディ！ウェイヴの 4 者間が締結された。この協定に基づき、この 4 者は、子ども達が読書に親しみ、新聞を積極的に読む環境づくりの共同推進を目的とする。活動内容として、子ども達が「自分と読書」「新聞を読んで感じたこと」「将来の自分」などをテーマに書いた作文を、各学校で選び新聞に投稿し、また、あまみエフエムでは子ども向けの本や作品の朗読などを番組内で放送する。奄美市 PTA 連絡協議会の会長を務める上述の K さんは「本をたくさん読む子もいるが、全く読まない子もいる。読書は子どもの学力にも大きな影響があるし、学力の向上には親の関わりが重要だ」と話し、本や新聞を読む習慣の定着を契機に、子ども達の学習意欲、保護者も巻き込んだ学力向上のための環境づくりを進めたいとする。

② 学習支援事業

奄美市では国の生活困窮者自立支援制度の任意事業の一環として 2017 年 7 月から、学習支援事業を実施している。自立相談支援窓口に相談に訪れた世帯や生活保護受給世帯のうち小中学生の子どもがいる世帯に支援員やケースワーカーが直接声を掛け、参加を勧めている。対象になるのは主に所得税非課税世帯などであるが、ひとり親世帯が多いという。委託事業として NPO 法人と契約して実施している。講師は教員免許を持っている人や退職した教員などである。定期的に来る子ばかりではないため、講師が自宅からの途中で子どもの家に寄って誘うときもある。この教室での成果としては、最初は高校に行く気がなかった中学 3 年生の生徒が、勉強を見てもらったことで、高校を受けてみようという気になった事例がある。この生徒は、別の学校の生徒と教室で友達になり、二人で同じ高校を受験して合格した。現在は島の高校は定員割れのため、ある程度の学力があれば合格するのであるが、まず受験するという意識が持てたことの意味は大きいとされる。

（3）龍郷町における事例

① 伝承文化の継承

龍郷町は隣接する奄美市のベッドタウンとして近年、人口が増加しており、町では、様々な方面から教育に力を入れている。町では地域の伝統文化が学校での活動とともに子ども達の生活と密接につながりながら継承されている。奄美大島には旧暦 8 月の初丙の日を新年として祝う「アラセツ」という風習があり、その折に集落ごとに「八月踊り」が行われる。集落ごとの八月踊りでは、集落の人々が太鼓と踊りで家々を回り、各家ではその人々にご馳走を振る舞うことも行われる。子ども達はこの八月踊りに参加し、小学校でも運動会で踊るので練習するところが多い。

また島では島唄が三味線による弾き語りで歌い継がれ、島の各地で子どもたちが島唄や三味線を習っている。龍郷町下戸口公民館で、毎週木曜日 19 時から 20 時に小学生に三味線を教えている Y さんによれば、子ども達が島唄を習うようになったのは、近年、島出身の歌手、元ちとせが有名になってからだという。三味線はある程度手が大きくないと弾けないので、3 年生までは島唄を習い、4 年生からは三味線も習う。島唄には原則、楽譜がないので耳で聴いて体で覚えるしかない。子ども達は自分で希望して教室に通い始め、小学校卒業までやめる子はほとんどいない。地元の戸口小学校では学芸発表会で島唄を毎年歌い、習っている子どもは、学校では他の子に教える「先生」になるので、それも励みになっている。地域の伝統は様々な面で、子ども達の生活、そして学校の活動と緊密に結びついている。

② 公営無料塾～龍進未来塾

龍郷町では町に学習塾がないため、中学生を対象に 2017 年度から「龍進未来塾」という公営の無料塾を英語と数学について月 3 回、土曜日に開催し、学習習慣の定着・学習意欲の向上を図っている。生徒の送迎は町の社会福祉協議会が協力し、講師は英語は ALT の教員、数学は元高校教員や町役場の職員で担当する。各科目とも習熟度別に三つのグループに分かれる少人数体制である。塾に通った生徒達は、勉強時間が増加し、わからなかったところが理解できるようになり、その結果、苦手な科目に対する意識も変化している。県の学力定着度調査でも、龍郷町の中学校全体で数学や英語の平均点が前年度に比べ向上しており、未来塾での学習の効果もあるの

ではないかと推測されている。
③　子ども博物学士講座―地域の特性を生かした教育～
龍郷町では地域の特徴を生かした環境教育における取り組みとして『ESD＝ Education for Sustainable Development』を推進し、毎年「身近にある自然環境から触れ合う体験・経験から、感性や共感を育む」ことを目的として、子ども博物学士講座として年 7 回開催している。講座を始めた理由は「子ども達が島のことを知らない」「ほとんどの子どもが、高校を出たら島を離れる。そのときに島のよさを他の人に伝えられるようになってほしい、また島に誇りを持ってほしい」ということであった。講座の内容は多岐に亘り、「クロマグロ養殖見学」「砂糖はどうやってできるの」など、地域の身近な生き物や自然を題材にし、座学だけではなく、見学・体験に現地まで行くことも多い。研究発表では講座で学んだことや自主的に調べたことを、紙芝居やパネル、奄美に生えている植物になりきった劇形式など、各自が工夫して発表し、プレゼンテーションの能力、経験も身につける機会となる。この「子ども博物学士講座」は、地域の資源を生かしながら、地域について学び、学習スキルを伸ばす総合的学習の好事例ということができるだろう。
（4）将来のキャリアに向けた活動
奄美市では 2012 年度から、主に中学生を対象に「かっこいい大人を見てもらいたい」という目的から「奄美市進路ガイダンス」を実施している。このガイダンスでは、医師、ウェブデザイナー、介護福祉士、看護師、管理栄養士、言語聴覚士、コンピュータープログラマー、歯科衛生士、システムエンジニア、診療放射線技師、弁護士、保育士、薬剤師など様々な職業についてそれぞれブースを設け、島でその仕事で働く「シマッチュ（島人）先輩」に話をしてもらう。ガイダンスの内容は『奄美のお仕事ガイド』として冊子も発行されている。上述の T さんは市の担当者として「島は人口減少、少子高齢化で担い手が減っていくのはわかっている。島に帰ってきてほしいが、仕事がないと帰ってきてもらえない。帰ってきてもらう環境を作る必要がある。島のために必要な仕事があり、そういう仕事につけるようなスキルを身につけてほしい」「例えば現在、すでに島には医師が足りないが、今後、開業医自身が高齢化し、さらに減少するのは明らかで、医師や医療関係の仕事は島で絶対必要である。そういった仕事に就くにはどうすればいいのかを、自分自身で考えて将来を選んでいってほしい」と語る。
　若い人々が高校卒業後に大学進学、就職等で島から都会に出ても、帰ってきてほしい、また島に帰ってこられるようなスキルを身につけてほしい、という意識は島全体で共通の認識であり、龍郷町でも奄美市同様、子ども達のキャリアと島の将来を考えた取り組みがなされている。龍郷町の教育長は、「多くの子どもや保護者にとって、高校に入るのがゴールになっているが、高校は、その先の通過点だということをわかってほしい。高校を卒業した後のビジョンを提供し、将来の夢が叶うための学力をつけてあげたい。そして、それぞれの子どもが目標を持ち、その目標に向かって努力していってほしい」と述べている。
（5）考察
　同じ奄美大島の中でも、都市化が急速に進行している奄美市と、伝統行事や芸能が子供達の日常生活のより身近にある龍郷町とでは、地域が抱える課題が異なる面もあるが、両地域とも共通して、地域社会関係資本を保持、あるいは再構築しながら子ども達を育てていこうとする、教育環境改善への取り組みが様々な形で確認された。本研究によって得られた知見は次のとおりである。（1）地域のキーパーソンが中心となり、自治会や地域の団体を通じて地域のネットワークが活用され、地域社会関係資本が保持、あるいは再形成されている。さらに、これらの取り組みの中心となる人々は、いくつかの立場を兼ねることも珍しくない。こうした人々が地域社会関係資本の活性化、形成に不可欠な存在といえよう。その一方で、そういう人々のおかれた状況次第では活動が停滞することもありうる。自発的に発生した活動を、自治体など行政側が必要に応じて支える意義はこの点にあるともいえる。（2）島独自の伝統行事や伝統芸能の継承活動を通じて伝えられる地域のつながりや地域に対する誇りは大都市では考えられないほど強く、子ども達の生活に根付き、受け継がれている。それが子ども達の島への愛着を育み、社会関係資本の形成に貢献している。（3）奄美市でも龍郷町でも、市や教育委員会が中心となって学習支援事業を行うことにより、教育環境改善に資する新たな社会関係資本が構築されているということができる。また龍郷町の「子ども博物学士講座」は学校教育の枠だけに収まらない自由な学びを促す独自の取り組みとして評価される。（4）子ども達に地域社会関係資本、家族社会関係資本、学校社会関係資本がそれぞれ形成され、密度の濃い社会関係資本が存在するがゆえに、そうした地域への愛着によって「島に戻る＝島を継承する」という選択が再生産される一方、「そんなに頑張らなくても、うまくいかなくても、島に戻ればなんとかなる」という意識も生んでいるとされる。関係基盤があることに安心して、あるいはそれを頼り、学力や高校卒業後や将来のキャリアプランに対する子ども自身や保護者の関心が低いこともある、と指摘された。現在、島にある高校３校とも定員割れとなっており、「どこかの高校には入れる」と、高校卒業後に必要な学力をつける意義を見出さず、学力や将来のキャリアプランの必要性に関心が低いケースも少なくないと言われる。（5）しかしながら、現在の島の経済、労働状況では「なんとかならなく」な

っているのが現実である。島の限られた経済圏の中では、それなりの安定した収入の就業の機会は限られている。一方で、高齢者のみの世帯は多く、医療や介護、あるいは弁護士など専門職の仕事の需要はある。にもかかわらず、その需要を満たすだけの人材が島で育っていない、というスキルギャップの問題が生じている。将来、島で安定した仕事に就けることも視野に入れ、キャリア教育の一環として島で必要とされる資格やスキルを身につけられるための施策が模索されている。

上記の（４）（５）に見られる特徴は、沖縄の社会構造と移動の研究においても「一種の文化型とも言える特異性」（三隅 2013）が指摘されているが、「島」という地域は独特の磁場を持ち、地域内で完結するボンディング（結束型）な社会関係資本が希求され、形成され続けているといえる。しかしながら、実際の経済、雇用には地域外へのブリッジング（橋渡し型）な社会関係資本が不可欠になっている。結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の間には緊張関係が存在し得る。すなわち、橋渡し型社会関係資本のもたらす外部の経済論理に結束型社会関係資本は呑み込まれやすいといえる。しかしながら、離島の場合は、外部の論理や力に対抗しうる「場」が結束型社会関係資本を形成し続け得る。両者のバランスをとった社会関係資本の形成、持続への取り組みは、多様な立場から行われることは他の離島にも必要だといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 豊　浩子	４．巻 13
２．論文標題 戦後初期の米国沖縄統治における図書館政策の推移	５．発行年 2020年
３．雑誌名 生涯学習・社会教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩崎久美子	４．巻 884号
２．論文標題 武道を通じた「信頼」の形成：奄美大島「ゆずり葉の郷」に見るソーシャル・キャピタル	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会教育	６．最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 豊　浩子	４．巻 第74巻2019年5月号(通巻第875号)
２．論文標題 離島における社会的つながりの再構築ー鹿児島県奄美大島奄美市・龍郷町の事例からー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会教育	６．最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩崎久美子	４．巻 第74巻2019年5月号(通巻第875号)
２．論文標題 社会的セーフティネット構築について諸外国から学ぶこと	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会教育	６．最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩崎久美子	4．巻 Vol. 60, No.1
2．論文標題 エビデンスに基づく教育：研究の政策活用を考える	5．発行年 2017年
3．雑誌名 情報管理	6．最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岩崎久美子	4．巻 2017年5月号（no.851）
2．論文標題 IT労働市場での移民の雇用創出：社会的企業サンブロン	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会教育	6．最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩崎久美子	4．巻 2017年7月号（no.853）
2．論文標題 あらゆる人々へのオンライン学習機会の提供：ピアツーピア大学	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会教育	6．最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 豊　浩子
2．発表標題 揺籃期における米国のパブリック・ディプロマシー　ー奄美琉米文化会館の蔵書構成の分析を通じてー
3．学会等名 日本図書館情報学会春季研究集会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 岩崎久美子、荻野亮吾、柏木宏、金藤ふゆ子、近藤真司、左京泰明、佐藤智子、ジャン＝フランソワ・サブレ、須原愛記、園部友里恵、中村由香、錦織嘉子、堀野亘求、豊浩子、吉川理恵子	4．発行年 2019年
2．出版社 一般財団法人日本青年館「社会教育」編集部	5．総ページ数 207
3．書名 社会的セーフティネットの構築ーアメリカ・フランス・イギリス・日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岩崎　久美子 (Iwasaki Kumiko) (10259989)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	